



(4000円)

# 特 許 願

(特許法第30条ただし書の規定による特許出願)

昭和 50 年 7 月 24 日

特許庁長官 斎 藤 英 雄 様

1 発 明 の 名 称

アセシ  
安全かみそり

2 特許請求の範囲に記載された発明の概略

3 発 明 者

特許出願人と同じ

4 特許出願人

ヨコハマシニシタヘナサナコ  
神奈川県横浜市西区花咲町 4-105  
シニズ ヲウ  
清水 三 郎

5 代 理 人

東京都新宿区西新宿6丁目7-23  
ストークビルディング901号 〒160  
(5712) 弁護士 梶 谷 昇 次  
電話(03)343-3721(代)

6 送付書類の目録

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| (1) 明 細 書 1 通 | (4) 願 告 書 本 1 通 |
| (2) 図 面 1 通   | (5) 出願審査請求書 1 通 |
| (3) 委任状 1 通   |                 |

## 明 細 書

1. 発 明 の 名 称

安 全 か み そ り

2. 特許請求の範囲

- (1) 2枚の押え板の間にブレードを介在させ、該押え板の前縁とブレードの刃を平行に且階段状に並べその刃を両押え板の側方突出縁が決定する剃面付近に達せしめて一体的に固定して刃枠としたものに於いて、該刃枠2個を肩が接近するようにならべ、その両刃枠の刃は両剃面の交る接線に略対称的に角 $\alpha$ で傾斜させ、且両剃面相互のなす角 $\beta$ を $180^\circ$ 以下にして把柄に取付けた安全かみそり

- (2) 前記角 $\alpha$ を調節可能にした第1項記載の安全かみそり

3. 発 明 の 詳 細 な 説 明

普通のかみそりで毛を剃る場合、第1図の如くその刃Bを毛幹Kに向つて刃の縁に対し直角方向OAに進めて剃るのであるが、刃Bを斜方向OBに進め、即ち斜剃りをするときはその分力ABに

相当する横引力による側作用が生じ毛幹KをOB方向の投影長さBF間の刃で抵抗少く容易に切断できる長所があることは公知である。しかしこの斜剃りは傾斜角 $\alpha$ が小となるに従いとかく刃が横方向OBにすべり皮ふを疵つけ易い危険を伴うので熟練を要する。

然るに安全かみそりでは一枚のブレードを押え板で両側から挟んだもの、又は第2図A、Bの如く薄い間隔板1を介在した2枚のブレード2、2'の刃がずらしてならべられその両外側面を押え板3、4にて、その前縁を曲曲してブレードの刃と共に階段状になるよう挟持されたもの又はかかる2枚のブレード2、2'を剃面側の押え板3、4にて同様状態ではさみ一体的に固着して(以下これらを刃枠5と總称する)この刃枠5を把柄7側の案内杆6に対して滑脱可能にしたものがあるが、その刃枠が前述の如き何れの型のものであつてもすべて本発明に適用しうるのである。これらのブレード2、2'の刃の先は大むね押え板の先方突出縁9、9'を結ぶ線、即ち共通接線にて作る面8の

⑬ 日本国特許庁

## 公開特許公報

⑪特開昭 52-15761

⑬公開日 昭52(1977) 2. 5

⑫特願昭 50-90541

⑭出願日 昭50(1975) 7. 24

審査請求 有 (全5頁)

庁内整理番号

6543 46

⑮日本分類

125 G22

⑯Int. Cl?

B24B21/14

近くに達している。以下この面を剥り面 8 と称することとする。この剥り面 8 を皮ふにそわせて軽く押えながら刃に直角に引くと両押え板先端 9, 9' 間に来た皮ふを緊張させながら皮ふに刃が接してすべるので毛刺を安全に剥ることができるのであるが、斜剥りをして同様両押え板の先端 9, 9' が作用して皮ふを緊張させ大して熱線しなくても前記第 1 図で説明したような危険は少なくなるがそれでも誤つて刃を平行方向 OB に近くすべらせると皮ふを疵つける虞があることに変わりはない。

本発明は刃 2 個をその側縁を接近してならべ両刃の刃は両側面が交つた被縁に略対称的に傾斜させ(以下その角を傾斜角  $\alpha$  という)且両側面相互のなす角(以下これを開き角  $\beta$  という)を  $180^\circ$  以下にして把柄に取付けた安全かみせりであつてこれを把柄にて OB 方向に引いたとき両刃の刃に作用する夫々の横方向分力 AB を互に釣合せて自動的に傾すべりを防いで安全に斜剥りができ且刃の切れ味を良く長持ちさせるようにしたものである。勿論一方の刃を抜去つて刃 1 個

としこれを OA 方向に直角引きして剥ることも可能である。

本発明の実施例は説明の便宜上第 2 図の如き樹脂製の 2 枚刃の刃をを用いた場合について説明するが片刃又は両刃ブレードを用いた他の刃が分解自在な構造のものを用いてもよい。

第 3 図 A に示す如く 2 つの刃 5 を嵌合支持する案内板 11 の背面に集合杆 12 を設けこれを一本の把柄 13 に略左右対称的に取付け第 3 図 B の如く左右の刃 5 の各側面のなす開き角度  $\beta$  を  $180^\circ$  より小さな角にする。而して左右の刃 5 は前記両側面の延長が交つて作る被縁 14 に対して略均等な傾斜角  $\alpha$  にて傾斜させて固定する。従つて皮ふの彎曲半径の大なる部分に対してはその円弧 15 は両刃の外側部分 17 にて接し、彎曲半径の小なる部分に対してはその円弧 18 は両刃の中央寄り内側部 19 にて接するので皮ふの彎曲半径の大小により刃の外側寄りか又は中心寄りの剥る部分の位置を変更することができる。

また刃 5 は被縁 14 に対して角  $\alpha$  で傾斜させて

かくから把柄 13 を被縁 14 方向に平行に引くとそのとき両刃ともに斜剥りをする事となり両刃における各分力 AB は方向が互に相反して釣合るので傾すべりが自動的に防止されるから単刃の如く余分の力で刃を OB 方向にすべらぬように支持する必要なく斜剥りを安全になさしめるのである。また一枚刃の刃 2 組を用いた場合も同様に支持すれば前例と同様な作用効果がある。

なおこの様な実施例で両刃 5 の刃の間が離れているとその間では剥れないのでこれを防止するため両刃の内側下部を剥り双方の刃を出来るだけ接近させて間隔をせまくするがよい。或いは双方の刃を出来るだけ接近させ、左右の樹脂押板を夫々一体に製造してもよい。

以上は両刃 5 を把柄 13 に対し固定関係に取付け、即ち角  $\alpha$  及び  $\beta$  を一定にした例について説明したが、これら角  $\alpha$  及び  $\beta$  の内少くとも一つを使用個所に応じて適当に調節可能にすることは一層効果的である。(第 3 図のものはナット 22 をゆるめて角  $\alpha$  を調節しうようにしてある。)

その一例は第 4 図に示す如く刃 5 を支持する

集合杆 12 は屈曲しその先端部 15 を内側に突出させ先端に孔を設け、これに略対称形の他方の集合杆 12 の孔を重ねこれに把柄 13 の先端の鉤付螺絲 33 をさし込みナット 34 で固定したもので必要に応じて螺絲 33 を軸として集合杆 12 を回動し両刃 5 の開き角  $\beta$  を調節可能にしたものである。

更に第 5 図の実施例では左右の刃 5 が嵌合された案内板 11 にはその背面に軸 20 を夫々垂設し、これを羽板 21 に挿通しこれにナット 22 を螺絲し、必要に応じて両刃の刃が剥面の被縁 14 に対する傾斜角  $\alpha$  を変更しうるようにし、その上該両羽板 21 はたて軸 23 に枢支されて揺動関係となり、揺動の中央部にたて軸 23 に嵌合した巻ベネ 24 の脚にて羽板 21 を開き気味に押作用させ同様軸 23 に嵌合した管体 25 には短杆 26 を立設しこれをコ字形金具 27 の中央の孔 28 に挿通しナット 29 を締めてたて軸 23 を引きよせコ字形金具の両脚先端にて羽板 21 をベネの力に抗して押し、両かみせり刃の剥面のなす開き角  $\beta$  を  $180^\circ$  以下にしておき、使用個所の彎曲度に応じてナット 29 を操作して開き角  $\beta$  をも変

更可能にしたものである。

第5図のものは例が2枚の羽板21を無番連結し且ベネを設けたのに代え、第6図のものは1枚のベネ板31をもつてし中央で弾性的に屈曲しうるようにし、たて軸23はベネ板31中央の刃枠側に接せしめ、たて軸23に立設した短杆26をベネ板31を貫通して前記の如くコ字形金具27に挿通しその外方よりナット29を締めてたて軸23を引きよせ前記の様に刃枠側面のなす開き角 $\beta$ を変更可能にしたものである。或いはたて軸23はベネ板に直接連結し短杆26は刃枠側に固を設けてベネ板に挿通し、同様にコ字形金具27をナット29にて締めつけるようにしてもよい。

第7図は左右2枚の弾性薄体で作った羽板21に夫々案内板11を固着し案内板11に刃枠5をさしこむようにし、該羽板21は内側端にて重ねそこに螺杆36を挿通してネジ37で締め両刃枠の傾斜角 $\alpha$ を調節可能にし、その後方よりコ字形金具27の中央孔を螺杆36にさしこみ、該コ字形金具27の外方よりネジ38を螺杆36にねじこみその締め具合により

該コ字形金具27の両端の脚にて羽板11の開き角 $\beta$ を変更しうるようにしたものである。

更に前記第3図の例にかける集合杆12に代え第8図の如く適当強度の弾性ベネ材36をもつてし、前記角 $\alpha$ 、 $\beta$ はかみそりの適用されるものの外形に応じその適用の弾性により自動的に開き角 $\beta$ を自由に変更しうるようにしてもよい。

第5図乃至第7図に示すものは一つのたて軸23により開き角を変更したが、第9図Aに示すものは2つの軸40により開き角 $\beta$ を変更するもので両刃枠の背部に直接又は案内板11の背面に夫々横軸40により夫々の集合杆12を枢着し、両集合杆を把柄13に固着したもので両刃枠の傾斜角は一定でも開き角 $\beta$ を自由に変更しうるようにしたものである。勿論この場合第9図Bの如く案内板11を羽板21に軸23で支え、羽板21を別々に図示の如く集合杆12に枢着して角 $\beta$ を任意角度をも調整可能で可変的にしてもよい。

以上のような構成であるから本発明安全かみそりを皮ふにあてて把柄の軸方向に引くことにより

熟練を要せずして削そりが容易且安全に行い得られ、また刃枠の一方の刃を取外せば直角そりも可能である等の効果がある。

なか、本発明は角 $\alpha$ 、 $\beta$ を変更させる機構を種設計変更しうることは勿論である。

#### 4. 図面の簡単な説明

第1図はかみそりの刃と毛幹に対する刃の切斷運動方向との関係を示す平面図、第2図Aは安全かみそりの刃枠の一部拡大正面図、同図Bはその縦断右側面図、第3図Aは本発明安全かみそりの一実施例の背面図、同図Bはその平面図、第4図は他の実施例の背面斜視図、第5図は他の実施例の背面斜視図、第6図はその変形例の背面斜視図、第7図は更にその変形例の背面斜視図、第8図は更に他の実施例の背面斜視図、第9図Aは更に他の実施例の左寄背面斜視図、同図Bは更にその変形斜視図である。

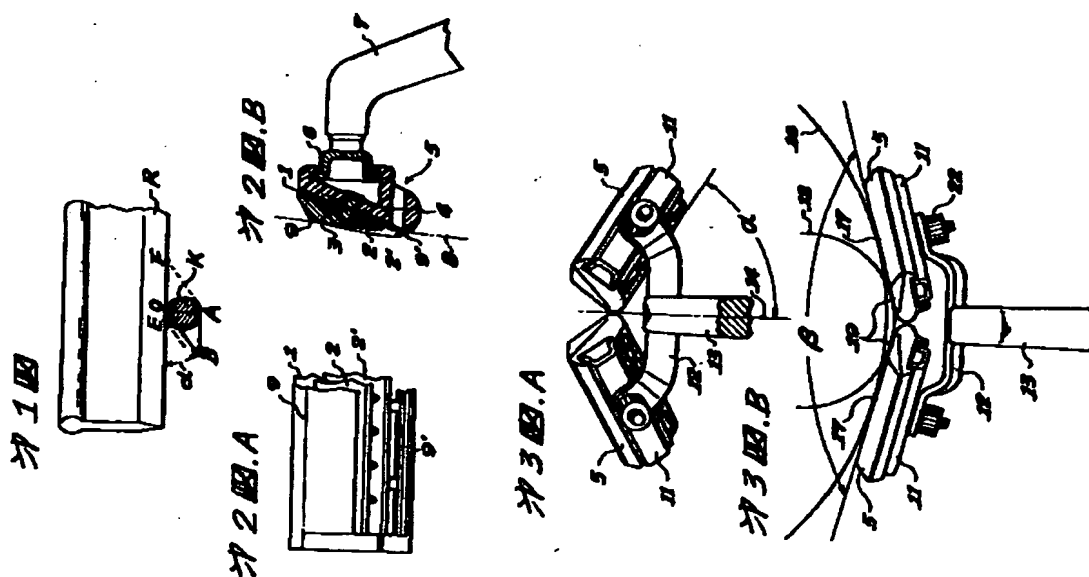
1…間隔板、 2, 2'…ブレード、 3…押え板、 4…押え板、 5…刃枠、 6…案内板、 7…把柄、 8…剃面、 9, 9'…突出部、 11…案内板、 12…集合杆、 13…把柄、 14…硬線、 15…先端部、 16…円弧、 17…外側部分、 18…円弧、 19…内側部、 20…軸、 21…羽板、 22…ナット、 23…たて軸、 24…巻ベネ、 25…管体、 26…短杆、 27…コ字形

金具、 28…孔、 29…ナット、 31…バネ板、  
 32…孔、 33…螺杆、 34…ナット、 35…弾性  
 材、 36…螺杆、 37…ネジ、 38…ネジ、  
 40…縦軸。

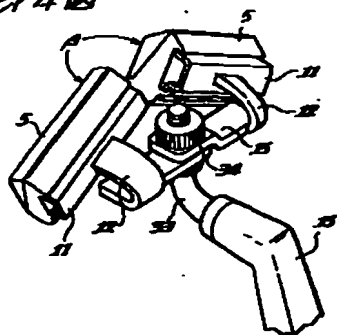
特開 昭52-15761(4)

出願人 清水 三 郎

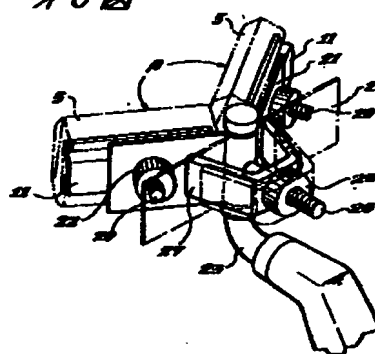
代理人 堀 谷 丹 次



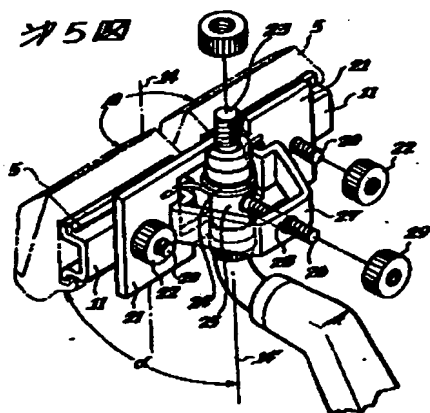
第 4 图



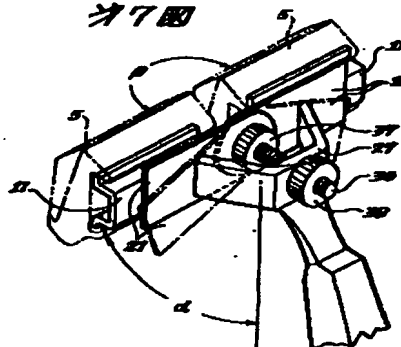
第 6 图



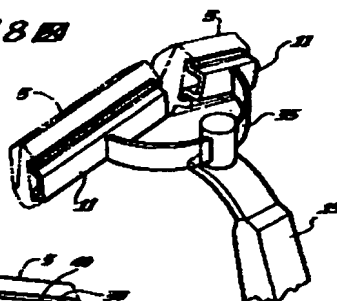
第 5 图



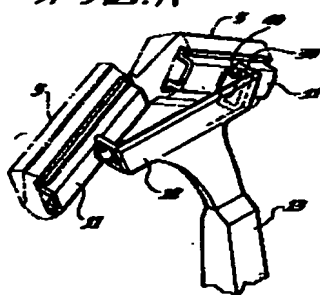
第 7 图



第 8 图



第 9 图.A



第 9 图.B

